
溶けていく嘘

春後秋前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

溶けていく嘘

【Nコード】

N9551S

【作者名】

春後秋前

【あらすじ】

僕は君が大切だった。そんな火傷も消して、君への負担を消してあげたかった。

だけど、僕が本当に大切だったのは――

《あるサイトにも重複投稿しております》

「その傷、消さないの？」

僕が尋ねても、君は微笑んで首を横に振るだけだった。

いつも、そうだ。

「消したくないの」

「でも、整形でいくらでも消えるよ？　お金なら、僕が出してあげるよ？」

「……いいって」君は困ったように笑った。「貴方に負担かけたくないもの」

そんな、遠慮しなくていいのに。

付き合い始めて早一年。だけど、まだ僕は彼女の右頬を覆う火傷に慣れない。その黒ずんだ火傷が、綺麗な顔を崩してしまっている。見る度に心が痛んだ。

五年前、僕と彼女が出会う二年ほど前の事。隣の家から出た火で、自宅が全焼してしまったらしい。深夜の事で、寝ていた彼女は逃げ遅れた。そんな彼女を助ける為に、姉が水を被って飛び込んでくれたと聞いた。だが、彼女を庇って姉は死んでしまったそうだった。その際、火傷がついた。

姉に感謝している。その証かもしれない。姉に謝罪している。その証かもしれない。

でも、もう消してしまっても構わないと思うんだ。もう、十分だと思っただ。

「ねえ、どうしてそんなに火傷を残したいの？」

「消しちや駄目なのよ。これはだって……あ」

君はふんわりと微笑む。火傷に蝕まれた顔でも、とても可愛らしい。

「うつん、何でもない。とにかく、消したくないの！」

「僕に遠慮してるの？　君が——その——お金が無い、とかでさ」

ちょっと失礼だったかもしれない。だけど君は、驚いたように目を丸くするだけだった。そして気分を害した訳でもなく、目を細めた。口元もやはり緩んでいる。僕もつられて笑った。彼女の微笑みは、つられて笑ってしまうほど柔らかく可愛らしい。火傷のせいで可愛らしさは半減してしまっているけれど。それでも可愛い。

「そんなんじゃないよ」

「そうかな？」

「そうよ。もう、馬鹿にしないで」

君は頬を膨らませて言う。そういう仕草は、やっぱり可愛い。でも僕にはその仕草が、本当の怒りを隠している様にも見えた。今更消せない、とそう怒ってる様にも見えた。でも可愛い。君には悪いけど、本当の怒鳴り顔も可愛いからいつも反省できません。時々、いたずらして怒られたくなるくらい可愛い。火傷のせいで、可愛らしさは半減してしまっているけれど。それでも。

——でも僕は、君が心から笑っている顔が可愛いのかどうかは知らない。絶対、可愛いんだろう。でも見た事が無い。彼女は笑わない。笑おうとすれば火傷が痛むのだろうが、やっぱり笑ってほしいでもそれじゃ、消すしか方法は無い。だから僕はその火傷を消して欲しかった。

火傷のせいで、笑顔も、可愛い顔も崩れてしまっている。半減してしまっている。

「そうだ、診て貰うだけでもいいんじゃない？ 火傷、肌に悪いかもしれないし！」

「しつこい」

君はキリッと左目を吊り上げた。狐みたいな目になったが、シュツとしててやっぱり可愛い。

「……仕方ないわね、診て貰うだけ診て貰う事にするわ」

だけど君はすぐにふっと微笑んだ。優しい。女神様なみに優しい。僕は女神様に会った事無いけど。

その四日後に、病院へ行った。検査はすぐ終わったが、ハードだったらしい。彼女は疲れたと言ってそのまま病院のベッドで眠りこけた。滅茶苦茶可愛い。火傷のせいで、彼女の可愛らしさは半減してしまっているけれど。それでも。

消せばいいのに。

そう思いつつも、ニヤニヤしながら見てみると、医師が話しかけてきた。

「火傷、どうされますか？」

消さないで下さい。そう言おうとした。

だけど、その医師が

「消されますか？」

と先手を打った。いや、別に先手なんかじゃなかったかも知れない。でも僕はそれを聞いて、チャンスなんじゃないかと思った。思ってしまった。

「彼女に負担は？」

「これくらいの火傷でしたら、ありませんね。最新技術で少々値が張りますが」

「……お願いします」

言ってしまった。財布を確認し、ベッドの傍の机に置いた。十分足りる。

それを思った瞬間、深い安堵が僕を襲った。これでやっと君の可愛さも戻る。僕が見た事の無い笑顔も、みせてくれる。

そんな僕の思いを知らず、医師は淡々と言った。

「では、廊下でお待ち下さい」

動くべきなんだろう。だけど僕は安堵で動けなかった。彼女はそのまま連れて行かれる。ああ、これで彼女は誰にも負けないくらい、可愛くなる。自慢も出来るんだ。堂々と居られるんだ。

「あ」

僕は彼女が消えてしまってから気付いた。これは、僕のエゴなん

だと。僕は彼女が心から笑わないのが嫌だった。彼女の火傷が邪魔で嫌だった。僕が勝手に嫌だと思っただけだったんだ。

『火傷のせいで、彼女の綺麗さ、可愛らしさが半減してしまっている。』何度そう思っただろう？ そう、その通りだ。それが嫌だったんだ。本当に、僕の、僕だけの、エゴ。君の意思を視界にいれてない、エゴ。

君の可愛らしさだけがあれば、僕はそれで良かったんだ。

「——ちよつと！」

病院内で叫んだら駄目だろうに。目が覚めたのかすぐに返って来た彼女は、医師が止めるのも無視して僕に罵詈雑言を浴びせた。僕は耳をちくわにして俯いていた。自分が嫌になった。彼女に引つ張られ、初めて顔を上げた。同時に、罵声も耳に入る。

その罵声が耳を通り越して僕の心に溶け込み、訳の分からない感情とこつちやになって、渦を巻いた。

僕は泣き荒れる君を覚醒してない頭で怒鳴りつけると、病院を飛び出した。最後に見た君は可愛いらしく困ったような顔をしていた。

*

数日後、君は火傷をすっかり消して僕の家に来てきた。

「ごめんね、ごめんね。私の事を思ってくれてたんだね、ごめんね。酷い事言っちゃった」

ごめんね、ごめんね、ごめんね、と連呼する君は、どこか吹っ切れていた。やはり火傷から抜け出せなかったんだ。でも昨日、僕が怒鳴りつけたから、それで思い直して消したんだ。

——違う。

君は、消してしまえ！ と怒鳴られるのを待っていたんだ。そうすれば、消したのは自分の意思じゃない気がするから。仕方なく、なんだと思えるから。自分を責めないでいられるから。

君は優しくない。弱いんだ。弱いだけなんだ。

「そうそう、貴方の財布……忘れてたでしょう？ はい、どうぞ使った？」

「……まさか、そんな訳、ないでしょ？」

「そっか。だよねー」

それに対して僕は、君の表面を求めた。君の思いなんてどうでも良かったんだ。君の顔が綺麗になつて、皆に自慢できたらそれで良かった。

僕は優しくない。ずるいだけなんだ。

僕らの嘘が日常に溶け込んでいく。

彼女の顔を見た。可愛いはずだ。

だけど僕は、可愛くないと思った。初めてそう思った。

「可愛いよ」

また、嘘が溶けていく。君は可愛らしく笑った。吐き気がした。

（後書き）

どうもありがとうございました。

コメント、意見、批評募集しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9551s/>

溶けていく嘘

2011年5月3日11時25分発行